

芸術と技術をひとつに結ぶ、バウハウス (Staatliches Bauhaus)

記事のURL

<https://www.gklibrarykor.com/ja/article/10183/>

PDFレイアウトのプレビュー - 本文の一部のみ

鋼管を曲げて作った椅子、飾りのないすっきりとした卓上ランプ、円と四角だけで組み立てた文字のように、今日私たちが「すっきりしていて現代的」と感じるものの多くは、百年前のドイツにあったひとつの学校にルーツを持っています。その学校はわずか14年しか開かれていませんでしたが、建築や家具からグラフィック、書体に至るまで、現代デザインの姿を大きく変えました。この学校こそが「バウハウス (Staatliches Bauhaus)」です。バウハウスとは、簡単に言えば「1919年から1933年までドイツにあった美術学校で、工芸と純粋芸術をひとつに結び、大量生産と実用性を重んじるデザイン教育によって現代デザインの基礎を築いたところ」を意味します。名前はドイツ語で「家を建てる」という意味で、学校の教育方法とそこから生まれた作品の傾向をあわせて指す言葉としても使われます。本資料では、バウハウスが設立された背景と学校が移り歩いた歴史、独特な教育方法、そしてバウハウスが残したデザインの特徴と影響まで、順番に見ていきます。芸術と技術をひとつに結んだ学校、バウハウス バウハウスはどのように始まったのか？ バウハウスは、第一次世界大戦が終わった直後、新しい社会にふさわしい新しい芸術を求める空気の中で生まれました。(1) グロピウスの学校建築家ヴァルター・グロピウス (Walter Gropius) は191